

有明海をつなぐラムサール条約

日本野鳥の会佐賀県支部事務局長 中村さやか



有明海で越冬するハマシギの群れ
干潟の人気者、ムツゴロウとシオマネキ



アゲマキ採

りに出かけていき、たくさんさんのアゲマキを採ってきてくれた日を懐かしく思い出します。この貝は大変おいしく、干潟に行けばいくらでも採れたため、「お助け貝」と呼ばれ、長い間庶民の味方でした。

はそれぞれ異なっています。例えば、佐賀県の干潟はとても柔らかく、歩いて干潟の上を進むことができないので「ガタスキー」と呼ばれる板のような道具で滑るように進みます。しかし、荒尾干潟は砂質の干潟で表面は固いので、歩くことはもちろん、軽トラックや自転車でも干潟の上を進むことができます。同じ有明海の干潟でもこれは大きな違いです。

干潮の時間になると、はるか遠くまで干潟が広がり、よく見ると干潟の上に見える無数の点々はすべてヤマトオサガニです。有明海の干潟のそばで耳を澄ますと、プツプツプツという底生生物たちが出す微かな音、潮が満ちてくる時の波のさざめき、シギたちの物悲しいような鳴き声、遠く波間を行く漁船のエンジンの音が聞こえてきます。時々、上にピョンとジャンプするのは、求愛行動をしているムツゴロウたち。もうしばらくすると潮が満ちてきて、シオマネキは巣に蓋をし、シギたちはエサ取りをやめ休憩に入ります。有明海には人々を癒す日本の原風景がまだ

そこかしこに残っています。有明海は長崎県、佐賀県、福岡県、熊本県にまたがる水域で、日本の約4割の干潟が有明海にあります。また、有明海は日本でもここで見られない、ムツゴロウ、ハゼクチ、ワラスボに代表される有明海特産種がこれまで23種類知られています。また、世界では有明海のみで生息する種が6種類生息しています。潮の干満差は大潮の時には最大6mにもなり、これはもちろん日本一です。しかし水深が一番深いところでも約20mしかありません。この大きな大きな水たまりのような海に、さまざまな生き物たちが暮らしています。

二つ目は有明海の三つの干潟がラムサール条約に登録されたことです。有明海には2017年現在、荒尾干潟（熊本県荒尾市）、東よか干潟（佐賀県佐賀市）、肥前鹿島干潟（佐賀県鹿島市）の三つのラムサール条約湿地があります。意外にも登録されたのはごく最近のことです。

同じ有明海沿岸の登録地のため、三つの干潟は似ていると思われがちですが、干潟の状態や飛来する野鳥の種類や飛来数、生息する底生生物

が小学生の時までは、干潟で「アゲマキ」というマテ貝に似た貝がたくさん採れ、両親が夏になるとアゲマキ採

同じ有明海沿岸の登録地のため、三つの干潟は似ていると思われがちですが、干潟の状態や飛来する野鳥の種類や飛来数、生息する底生生物

同じ有明海沿岸の登録地のため、三つの干潟は似ていると思われがちですが、干潟の状態や飛来する野鳥の種類や飛来数、生息する底生生物



干潟で生物調査をする鹿島市の子供たち



全身泥だらけになる干潟体験は大人気の活動です

田んぼ10年プロジェクト 全国集会報告

ラムネットJ共同代表 安藤よしの

東京・秋葉原で8月20日に開催した第3回田んぼの生物多様性向上10年プロジェクト全国集会の様子を簡単に報告します。この集会は、2020年まで、2020年以降と、田んぼ10年プロジェクトをさらに進めるための議論を深めることを目的として開催しました。

● 基調報告

まず、ラムネットJの呉地正行共同代表がプロジェクトの進捗状況を発表した後、国連食糧農業機関（FAO）の持続可能な農業プログラム（PAA）の主席オフィサー、マティアス・ハルワートさんが『持続可能な食料および農業と国連持続可能な開発目標（SDGs）のためのFAO共通ビジョン』水田の生物多様性の例、そして人々・暮らし・自然に対するその重要性』と題して報告しました。

ハルワートさんは、米そのものや、田んぼに生息する魚類をはじめとした生きものの種には、非常に多くの多様性があり、特にアジアの伝統的な農業において顕著であるものの、



マティアス・ハルワートさんの基調報告

農業の使用によりそれらが損なわれてきていると警告しました。そして、田んぼに関係する主な持続可能な開発目標としては、6 水と衛生、13 気候変動、14 海洋資源、15 陸上資源などが考えられるとし、良好に管理された田んぼは、生物多様性豊かな統合的な農業システムであり、農家の生態学的知識の向上が、農地の回復力の向上や、より栄養に富んだ作物の生産をもたらす、農業をより持続可能なシステムへと導くと述べ、農家の人々の参加型フィールドスクール方式のアプローチは成功率が高いことなどを指摘しました。

● 各セクターからの報告

① 農業者・民間稲作研究所の稲葉光國さんは、『生物多様性を育む循環型有機農業の進展』という報告の中で、長期残留殺虫剤の登場により「沈黙の春」が再来していること、循環型の有機輪作農業（麦、ナタネ、稲、大豆）で、生物多様性の向上と地球温暖化防止をめざす取り組みが図れることなどを発表しました。

② 市民団体・NPO 田んぼ代表の岩淵成紀氏さん、田んぼの生き

もの認証制度の可能性を探るための、4つの簡単な調査方法による田んぼの生物文化多様性指標について発表しました。

③ 生活協同組合・コープデリ小林新治さんは、『生産者と消費者のフードチェーンで繋がる田んぼとお米と環境』の事例として、コープデリで取り組む「佐渡トキ米お米プロジェクト」「お米育ち豚プロジェクト」などを紹介しました。

④ 地方自治体・いすみ市農林課の鮫田晋さんは、いすみ市の自然と共生する里づくりの中で、いすみ生物多様性戦略と有機稲作、学校給食における有機米の使用などについて報告しました。

なお、予定していたパネルディスカッションは、時間の都合で、中止せざるを得なくなりました。大変申し訳ありませんでした。

● 展示と試食

コープデリの協力により、参加者全員が生物多様性に配慮して作られたトキ米の焼きおにぎりと、お酒・お茶をたつぷりと味わうことができました。またJA全農、かわごえ里山イニシアチブ、NPO 田んぼなどによる展示が行われました。



コープデリの試食コーナー

日本の亜熱帯地域最後の自然海岸・嘉徳について

ラムネットJ理事 安部真理子



嘉徳浜から見渡す太平洋

生息していたのですが、いまでは奄美大島だけに残る貴重な魚です。この美しい場所に全長530m、高さ6.5mのコンクリートの直立護岸の建設計画が浮上しています。ここでは数年前より砂浜が侵食され、家やお墓を守るため護岸を作って欲しいという要望が出されました。しかしながら豊かな自然を失うことを懸念し、保全を訴える声も出てきました。

両者の声を取り上げられることになり、護岸建設が見直され、工事を伴わない方法も検討されることになりました。最近の自然保護の現場ではめったにない英断です。事業者である鹿児島県が組織する検討委員会では、砂浜の砂がどこから来るのか、なぜ減るのか、県内で行われてきた護岸工事のその後を検証すべきである、などのことが議論されています。引き続き、日本の亜熱帯地域最後の自然海岸である嘉徳海岸をそのまま残せるよう、護岸ゼロの案を後押ししていきたいと思えます。



海を守る会「奄美の森と川をいっしょに守ろう」のウェブサイト（QRコード）からアクセスできます。ぜひご協力ください。



エメラルドグリーンの水が流れる嘉徳川

日本海側には海に近い場所に潟と呼ばれる浅い湖が多くあります。これらはもともと海であったところが砂丘の伸長などによって湖となったもので、海跡湖といわれます。日本海側の潮間帯はせいぜい30cm程度しかなく、干潮と満潮の差がきわめて小さいことから干潟はできませんが、いずれも浅い水域であり、周辺にも小規模な沼地があったり泥田があった場所です。湖と言うよりは湿地という言葉がぴったりです。

石川県でも、河北潟のほか、赤浦潟、福野潟、邑知潟、木場潟、今江潟、柴山潟、北潟湖などがあり、このうちいくつかは既に干拓されるなどして潟が消滅してしまいました。河北潟も約50年前に国営干拓事業が始まり、湖の面積が1/4ほどになりました。本来は海とつながった汽水湖でしたが、農業用水を取るために防潮水門が建設され、現在は淡水湖となっています。干拓事業は、もともと水田をつくるために行われたものですが、

事業の途中で減反政策が始まり、干拓地ができたときには水稲はつくれなくなりました。そこで入植した農家は畑作を始めましたが、水はけの悪い土地であるとともにもともと稲作中心で畑作の経験がなかったため、営農にはたいへん苦労したようです。また、入植者が足りないため、県内の酪農家を誘致しました。それでも約200ha、1/5の農地が残りました。干拓地の農業は、畑作の失敗や乳価の低迷、未利用地の増加など、当初さまざまな問題を抱えていました。一方、淡水化された残存水面は富栄養化し、さらに堤防で人の視線から遮られるとともに濁って底が見えなくなった湖岸は、大型ゴミを不法投棄するのにも最適な場所になりました。

私たちが活動を始めた1990年代の河北潟は、そんな絶望的な状況でした。その後、干拓地の活性化の取り組みや河北潟クリーン作戦の推進などで、干拓地は活気ある農地に、河北潟は人々が憩うゴミのない水辺に変わりました。しかし、潟の富栄養化は改善せず、透明度は40cm程度しかありません。私たちは潟に再び海水を入れることを提案しています。



干拓事業で淡水化された河北潟の湖



湖岸のクリーン作戦

第12回 日韓NGO湿地フォーラム報告

ラムネットJ理事 陣内隆之



第12回日韓NGO湿地フォーラムに参加された皆さん

9月23～24日、ラムネットJは、韓国湿地NGOネットワーク(KWNN)、世界湿地ネットワーク(WWN)などとの共催で、第12回日韓NGO湿地フォーラムを韓国プサンで開催しました。

はじめに、2015年に開門宣言をしているプサン市より、ナクトンガン河口堰の水門開放問題について、深刻な環境悪化の現状と開門への期待が報告されました。続いて、荒瀬ダム撤去による自然再生の経緯や今後の課題などを、つる詳子さんより報告していただきました。荒瀬ダムの撤去は四大河川事業問題に取り組む韓国の関係者の間でも注目されていて、この報告も韓国のメディアで報道されました。

また、韓国からはDMZ(北朝鮮との国境の非武装地帯)とイムジン河の湿地、西海岸にあるファソン湖湿地の開発計画について、日本からは泡瀬干潟埋め立て、諫早

湾干拓事業および石木ダムの問題を報告しました。日本国際湿地保全連合(WIJ)の横井謙一さんからの「日本の重要湿地とラムサール条約登録湿地における公共事業」の報告では、日本の湿地の多くが劣化傾向にあり、その要因の半数以上が開発など人間活動によるものであることが確認されました。

2日目は、まず来年10月のラムサール条約第13回締約国会議(COP13)の開催国であるUAEのジャッキー・ジュダスさんから、中東の湿地NGOの活動などが報告されました。続くWWN議長のルイーザ・ダフさんの報告「WWNの戦略計画」では、10月に新たな体制が決まること、「湿地調査」と「NGOとのコミュニケーション」の2つをプロジェクトとして取り組むことが紹介されました。ちなみに、WWNは世界の141団体が加盟し、460万人の市民が参

加しているとのこと。 「湿地調査」の報告では、世界から350の回答(アジアは40)があったとのことですが、問題のある湿地からの報告が少ないことが気になりました。午後の討論では、まずラムネットJの柏木実共同代表からCOP13に向けたスケジュールなどの解説があり、KWNNのバク・チュンロク代表より韓国側の準備に関する報告がありました。

討論を通じて、ラムサールCOP13の登録やイベント申し込みなどは来年4月からではないかとの見通しがあり、次回の日韓フォーラムは来年4月下旬に行う方向で調整することになりました。COP13に向けては、COP14での決議を見据えて、「水の流れの大切さ」をアピールする日韓共同のサイドイベントを行うことが確認されました。

11月に佐賀市で行われるアジア湿地シンポジウムに向けては、シンポジウムで採択される佐賀宣言(Saga Statement)に反映させるために、諫早湾干拓事業をはじめとする水の流れを阻む人工物建設が湿地破壊をもたらす大きな要因であることを問題提起する提言を出すことが決まりました。



フォーラムの前日に行われたエクスカッション。ナクトンガンのハマシ堰では、水質悪化が大問題に



今回のフォーラムは、韓国プサン広域市庁内の大会議室で2日間にわたって開催されました

中国江蘇省ルドン鳥見ツアー報告

ラムネットJ事務局
後藤尚味

ルドンは黄海の南西、東アジア・オーストラリア地域水鳥フライウェイの中間に位置し、秋と春にシギ・チドリ類を始めとする渡り鳥がエネルギーを補給する広大な干潟があります。希少なヘラシギも飛来します。

ラムネットJの柏木実共同代表が長年にわたるヘラシギ保全の国際交流の中で育んできた信頼が実を結び、SBSイン・チャイナが現地受け入れ団体となり、9月25日〜28日にルドン鳥見ツアーが実現しました。初回は試験的なツアーで、一昨年編成したヘラシギ保全チーム「ステッピング・ストーン」のメンバーを中心に7名が参加しました。

かげで127種（ヘラシギ9羽、カラフトアオアシシギ150羽、シマアジ1300羽や、ツバメチドリ、カオジロダルマエナガ等）の野鳥を観察することができました。今後現地との連携を強化してルドンツアーを実施し、渡り鳥と湿地保全のCEPAを推進していきます。



お目当てのヘラシギ（上写真）も観察できました！

田んぼの生物多様性向上10年プロジェクト 地域交流会 in 河北潟のご案内

約50年前の河北潟干拓事業やその後の農地改良事業は、地域の生態系と生物多様性に重大な影響を与えてきましたが、現在、河北潟の干拓地と周辺の農地では、生物多様性の保全・再生に向けた農業が展開されています。今回の地域交流会 in 河北潟では、そうした地元での取り組みに関する発表を中心に、パネルディスカッション、ポスター展示を行います。参加費は無料です（懇親会、弁当代は有料）。みなさま、ぜひご参加ください。

11月25日(土) 河北潟田んぼ視察 (バスツアー) 13:30～16:30

- 内灘砂丘／河北潟干拓地／コハクチョウの観察など
- 懇親会 18:00～20:00 (金沢駅周辺にて／会費6000円程度)

11月26日(日) 地域交流会 10:00～16:00

会場：津幡地域交流センター (石川県河北郡津幡町字清水り123番地3／JR七尾線津幡駅より約500m)

- 主催：ラムサール・ネットワーク日本
- 共催／申し込み先：河北潟湖沼研究所
FAX 076-255-6941 Eメール info@kahokugata.sakura.ne.jp
- 参加申し込み締め切り：11月15日(水)
- お名前、所属、Eメール、都道府県、電話番号と、参加したいプログラム(11/25バスツアー、11/25懇親会、11/26地域交流会)と、11/26昼食(弁当・お茶付き1000円)の希望についてお知らせください。申し込み後、事務局より確認のご連絡をいたします。詳しくは、田んぼ10年プロジェクトのホームページ<http://www.ramnet-j.org/tambo10/> をご覧ください。

インフォメーション Information

● 市民集会「赤潮の発生原因」
時：11月4日(土) 13時30分～15時
場所：諫早市民センター 主催：諫早湾の干潟を守る諫早地区共同センター 内容：有明海の赤潮はどこから来るのか。今、諫早湾で起こっている汚染について、環境技術研究所の田中賀太さんが解説します。参加費無料。詳細は<http://www.seocius.jp/isahayabay/> 問い合わせ：電話0957-53-4557

● アジア湿地シンポジウム 日程：11月7日(火)～11月11日(土) 場所：ホテルグランデはがくれ(佐賀市)。11日の市民向け公開シンポジウムは東与賀文化ホール 主催：環境省、日本国際湿地保全連合、他 内容：アジア各国の政策立案者、NGO、研究者など多様なグループが、湿地の保全に関するお互いの知識や実践的な経験を共有し、学ぶ機会を提供するシンポジウム。ラムネットJも発表やブース展示で参加します。詳細は<http://aws2017.org/jp/> 問い合わせ：info@aws2017.org (実行委員会事務局)

● シンポジウム「諫早湾干拓がもたらした有明海漁業の衰退」日時：11月9日(木) 19時～21時30分 場所：アバンセ第3研修室(佐賀市) 主催：有明海漁民・市民ネットワーク／諫早湾開門研究者会議 内容：アジア湿地シンポジウムと並行して、独自に開催する諫早湾干拓問題のシンポジウム。堤裕昭さん、佐藤正典さんの講演や漁業者からの現状報告など。英語通訳もあり。資料代500円。問い合わせ：ph@arake-gyomin.net

ラムサール・ネットワーク日本 会員募集!!

ラムサール・ネットワーク日本(ラムネットJ)の活動は、会員の皆様からの会費や、カンパ、助成金などでまかっています。ぜひ、ラムネットJのサポーター(一般賛助会員)になって会の活動を支援してください。もっと積極的に湿地保護にかかわりたい方は、会の運営や活動を担う一般正会員としての入会をお待ちしています。そのほか、団体や企業としての入会も可能です。詳しくは事務局までお問い合わせください。

会員の特典

機関誌「ラムネットJニュースレター」を送付するほか、会員限定のメーリングリストに参加できます。ラムネットJが主催する催しの参加費が割引になる場合もあります。

入会申込方法

● 郵便振替 郵便振替用紙(払込取扱票)の通信欄に、ご希望の会員種別、お名前、住所、電話番号、Eメールアドレスをご記入の上、年会費をお振り込みください。一般銀行から振り込む場合は(払込取扱票への記入ができませんので)振り込み後に上記の申込事項をEメール、FAX、郵便等で右記の事務局までお知らせください。

● ウェブサイト 一般賛助会員、一般正会員については、ウェブサイトからオンラインでの入会も可能です。<http://www.ramnet-j.org/join/>にアクセスし、「入会申込フォーム」に記入して送信してください。年会費は郵便振替でご送金いただくか、ペイパルを使ってオンラインで決済することも可能です(クレジットカードも使用できます)。

振込先

ゆうちょ銀行 振替口座 00140-0-765702 ラムサール・ネットワーク日本
(一般銀行から) ゆうちょ銀行 〇一九(ゼロイチキョウ)店
当座預金 0765702 ラムサール ネットワークニホン

会員種別と入会申込金(年会費)

会員種別	正会員		賛助会員	
	総会での議決権があります		総会での議決権がありません	
一般	1口	5,000円	1口	2,000円
団体	1口	10,000円	1口	10,000円
特別	50,000円以上		30,000円以上	
企業	-		1口	100,000円

年会費(入会金)

年会費は毎年4月から翌年3月までの1年分です。入会初年度は、年度途中の入会でも入会金として1年分の会費をいただきます。2～3月に入会の場合、初年度の年会費(入会金)は無料となり、4月からの次年度の年会費としていただきます。

事務局

NPO法人 ラムサール・ネットワーク日本
〒110-0016 東京都台東区台東1-12-11
青木ビル3F TEL/FAX 03-3834-6566
Eメール info@ramnet-j.org